



理念

- 1、乳幼児期の子どもの最善の利益を守る保育園
- 2、親・地域の多様な子育ての要求を受け止め、
助ける保育園
- 3、すべての子どもたちが健やかに育ち、すべての
ものの生命を大切に、平和な社会をめざす保育園

めざす子ども像

- 1、心身ともに健康な子ども
- 2、自分の要求を持ち、豊かに表現し
実現しようとする子ども
- 3、自分を大切に、仲間を大切にする子ども

保育目標

- 1、子どもの人格を尊重し、子どもの全面発達を保障する
- 2、保護者と子育てを共同する
- 3、保育園の社会的役割を果たす

ビリ

川崎
洋子

だれが
だれが
うんどうかいのかけっこ

トイレにかくれようか
びょうきに なるうか

ビリなんて ふん
もんだいじゃない へん

そんなかお して
しらんかお して
はしってやらあ

うんどうかいの かけっこ



親子で遊ぼう会にはたくさんの方のご参加、ありがとうございました。

当日は小雨が降っていましたが、日本女子体育大学の体育館を使用でき、雨の心配で日程変更することもなく、予定通り行うことができました。

5歳児のエイサーから始まり、最後の父母会の競技はおとなたちの一生懸命さが印象的でした。笑いが多い締めくくりとなりました。父母会の方には準備も含め、終了後の片付けにもご協力していただきありがとうございました。

子どもの会話より

私 親子で遊ぼう会どうだった？

4歳男子 ぼく泣いちゃった

私 どうして泣いたの？

4歳男子 悔しかったから

5歳男子 でもね、勝つとか負けるとかじゃなく、楽しかったらいいんだよ。

主体的な姿をどう考える？

10月の職員会議では、「主体的な姿からの学び」として職員一人一人がエピソードを提出し、それを中心に話し合いを持ちました。今回の園だよりも各クラスからのエピソードをテーマにしました。

主体性とは「自分で考えて判断して行動すること」とうたわれています。そのために大人が子どもをどう見るかについては、子どもの行為に注目すること、客観的には、直接的に子どもとかかわるだけでなく、引いてみることも、子どもの力を信じることも、子どもには自ら発達する力があり、子どもの行為にはすべて意味があると理解すること。

そして、主体的姿を引き出すために、大人は、子ども一人一人の特性を知り、子どもの存在そのものを認め、子どもが安心してなかかわりを持つこと、観察、記録することが大切であること。子どもの行為をほめる、肯定的にかかわる、質問する、応答関係を持つこと。また、環境的にもおもしろいな、こうしたいな、興味のあるもの、好きなもの、危険のない環境設定であることが条件であること。

その中で、子どもは学ぶ楽しさを知り、探求心や知的好奇心が育ち、自己肯定感、自己主張、意欲、自信につながるのだと考えます。

園長 岡本 友子

11月の予定

11月	8日(水)	幼児クラス遠足(雨天の場合10日)
	9日(木)	健康診断
	16日(木)	身体測定
	21日(火)	体験保育(わらべうたであそぼう)
	29日(水)	試食会 一時保育室にて 16:00~18:15
	30日(木)	健康診断



お知らせ

- * 明星学園中学校の学生(2名)が職場体験に入ります。よろしくお祈いします。(11月6日~10日)
- * 第3者評価利用者アンケートにご協力くださり、ありがとうございました。
×切は10月31日となっていました。回収の箱に間に合わなかった方は、11/7までに直接郵送していただくと助かります。
- * 行事の時にお願いしていますカメラマンの撮影した写真は、登録した上で購入可能です。写真は公開期間が決まっていますので、期間内に購入をお願いします。(卒園、退園児は一定の期間が来たら登録を解除します)



今月は、各クラスから子どものエピソードを載せました。子どもと大人の関わり、子ども同士の関わりなど、保育園では、日頃たくさんのお話があるのですが、ほんの一部ですが紹介します。

エピソード

0歳児

この11月で全員が1歳を迎え、食事量も増えてきたひよこ組の子どもたち。食事の際に飲んでいたミルクも牛乳に移行してきていますが、移行をしてもなかなか牛乳を飲めず、コップを近づけると顔を背け飲むことを拒んでいたMちゃんがありました。担当も食べ物と組み合わせをあげてみたりと試行錯誤していたのですが、思うように進まず…の毎日が続いていました。そんなある日、担当がコップを口元に持って行くのではなく、Mちゃん自身でコップを持つところからすすめてみると…あんなに嫌がっていたのが嘘のように、自分でコップを上手に持って飲み始めたのです。「上手に持って飲めたね！」と声を掛けると、なんとも言えない嬉しそうな笑顔を見せていたMちゃんなのでした。

Mちゃんはきっと、牛乳が嫌いだったわけではなく、“飲まされる”ことが嫌だったのでしょう。1歳を過ぎたこの時期、“自分で”という子どもの中に出てくる自発的な気持ちを尊重して援助をすること、見守ることや待つことが、子どもの成長につながっていくことを実感させられる出来事でした。

子どもは、自分のことを見てくれている人や認めてくれる人の存在を、日々の生活や遊びの中で感じています。そして、そういった経験の積み重ねが、自信や、次にまたやってみようという意欲につながっていきます。これから、色々と自分でやってみる経験の中で、上手く出来た時には一緒に喜び、失敗した時には励ましたりしながら、共感することを大切に、子どもの中のやってみよう！やってみよう！とする気持ちを育てていきたいと考えています。

1歳児

部屋遊びで人気の「おままごと」 このような「ごっこ遊び」は、子どもたちの想像力を育みます。Yちゃんがカップにお手玉を入れ、棒ビーズと一緒に「どうぞ」とくれました。「おいしそう！いただきます！」と言って食べる真似をすると、隣にいたTちゃんも口を開けていました。その姿を見たYちゃんは、すぐにもう一つ作って持って来てくれました。楽しそうな声につられて、テーブルの周りにはどんどん友だちが集まってきました。「お客さんが沢山来たね」と言うと「レストランごっこ」に進展。次々に「どうぞ」「どうぞ」の声が響きます。お客さんたちも「いただきます」「おいしい」と子どもたち同士のやり取りを楽しみます。飲み物が欲しかったKくんは「牛乳！」「ちょうだい」と言葉でお願いすると「はい！どーぞ！」とすぐに持って来てくれるGくん。自分自身の経験を思い出し遊びに繋げているようでした。

遊びを通して友だちとの付き合い方も学んでいきます。時には意見が合わない時もあるでしょう。そんな時こそ友だちとの付き合い方が学べる機会です。また遊びながら言葉もぐんぐん覚えています。自由に楽しんで遊んでいるうちに結果として生きていくために必要な様々な力を身体で吸収しているのだと日々感じます。

2歳児

A君が壁と柵を使いL字に綺麗に空洞積み木を並べていました。いつもは通り道を作るよう促していますが、他の子は粘土をやっていてその空間はA君だけでした。どのように遊ぶか見守っているとどんどん形が変わっていきます。そのうち粘土で遊び終わった子がA君の作っている所を通り奥のコーナーで遊びたいと言いました。通り道が塞がっていて通れないのでどこを通ったら良いか伝えて欲しいことを伝えるとランダムに積んだ積み木の低い所を、“足を上げてそーっと通っていいよ”と伝えました。どの子もそーっと壊さないように慎重に通ります。そこにK君が“仲間に入れて♪”とやって来て仲間に入りました。K君はA君が何をイメージして遊んでいるのかわからない様子だったのでA君に問うと工事現場をイメージしているとの事でした。それを聞いたK君はすかさずネジはめの遊具を持って来て逆さに置き、工事中と目印になるコーンをイメージして並べていきます。とても面白いアイデアでした。A君とK君の工事現場を何度もお友達が行き来しますが誰も壊そうとはせず、むしろ壊さないよう気を付けていました。時々足が当たり崩れてしまいましたが、直したり、ごめんねと声をかけたり姿がありました。そのうち奥のコーナーではお弁当を広げて食べるHちゃんとAちゃん。どの子の遊びもそれぞれ保障されていました。子ども同士お互いの遊びを理解し空間や遊具を共有し、遊びがどんどん広がっていく楽しさ、面白さを感じている様に思います。見ているこちらもお互いがお互いを信じ、遊びを通し様々なことを学んでいるのだな〜と嬉しく思います。噛んだり叩いたり蹴ったり…そんな日々もありましたが、きっとその時期があり、乗り越え今の姿があるのだなと感じます。これからも、子どもたち自ら始まった遊びをそっと見守り楽しさ面白さを共有していきたいと思います。

幼児組

虫にとっても詳しくてクラスの虫博士のHくん。虫がいるとあっちでもこっちでも年齢関係なく呼ばれて慕われています。そんな頼りになるHくんですが、先月の親子で遊ぼう会に向けての練習で5歳児リレーの練習に参加しない姿がありました。「何が嫌なの？」と大人が聞くと、「たかさん以外の友達が見てるからやりたくない」とのことでした。その日は他の年齢の子たちが入室してから最後に5歳児のリレーの練習をして終わりました。しかし、毎回このような対応ができるとは限らず・・・他の年齢の友達がいてもやらなければいけない日があります。どうしようかな？と大人も考えていたところ、5歳児のY1くんが「みんな、Hくんは見られるのが嫌だから目を瞑ってあげて！」とまずは5歳児に。すると、5歳児の子たちが次々に下の子たちに「みんな目を瞑って！」と声をかけてくれました。そして、一緒に走るY2くんとHくんにバトンを渡すMちゃんはHくんの手をつないで「ほら、みんな見てない！一緒に走ろう！」と手を引いてくれたのです。Hくんもみんなが見ていないことを確認すると、ゆっくりですが走り出すことができました。他のみんなは目を瞑ると言っても指の隙間から少しその様子を見ていて、Hくんが走っている姿を見ると「Hくん走った！」「走れたよ！」と小さい声で口々に言っていました。そして、走り終えることができたHくんを見るとみんなで「できたね！」と声を揃えて喜んでくれました。その場になかった担任にも入室してすぐに報告に行く子もいました。みんなで応援をするだけでなく、一緒に喜んでくれる・・・なんて心の優しい子たちなのだろうと大人たちも思いました。もちろん、5歳児だけでなく、3歳児も4歳児もHくんの普段の様子を知っていたからこそ5歳児の子たちの声かけにすぐに協力してくれたのだと思います。子どもが子どもを観る力、それに合わせた思いやりの気持ち、本当に子どもたちの心からの優しさなんだなあと感じました。